観世流改訂謡本

外十三

絃上（ケンジョオ）

八月

シテ　村上天皇　前ハ老翁
前ツレ　老女
前ツレ　藤原師長
後ツレ　龍神（謡なし）
ワキ　師長従者

〔ワキ次第上〕〔ツレワキ ヨワク〕八重の潮路を行く舟の。八重の潮路を行く舟の唐土いづくなるらん

〔師長付〕抑これハ太政大臣師長とハ我が事なり

〔ワキ〕偖もこのきみ天下に隠れなき琵琶の御上手にて御座が。入唐の御望ましましまそうより。此度思しめ

しほ道すがら名所の月をも御覧
ぜん為に。唯今津の國須磨の浦に御
下向にて候 師長サシ上〽われかくてその夕べを都
の空。まだ夜深きに旅立ちて。末に見
えたる山崎も。過ぐれば跡にはやな
りて 下 ロ上ゲ ツレロ〽波こそ袖の湊川。波こそ袖
の湊川。まだ知らぬ方もわれは生

田の渡り来る日かまの向まで。心筑紫の旅の道。されども是は唐土の。門出と思へば勇みある。駒の林をよそに見て。須磨の浦にも着きにけり須磨の浦にもつきにけり

ワキ詞

御急ぎ候程に。是ははや津の國須磨の浦に御着まて候。暫く此處に御休み

あり。事の由をも御尋ねあらうずる

まそゐ

シテツレ二人上一セイ「持ちかぬる。汐汲む桶の苦

しきに。又力づく。老の杖拙き業

を須磨の浦眺に憂きやゐるらん

シテサシ上「面白やうらに入日は海に浮み。須磨

や明石の浦の様。塩焼く海士の心

よも。さも面白うゐあり　ツレ上「南を遥に

眺むれば雲より續ける紀の路の小嶋

シテ同 由良の戸渡る早舟も。汐追風の吹

上や遠浦ながら住吉の。松こそ見え

けれ海越しに シテ 富嶋の磯や昆陽

難波 ツレ 名より繪嶋と云ひながら シテ いら

でゝ筆にも及ぶべき。あら面白の浦

の氣色や げによや面白き。海士の磯

屋とや淡路潟。あそ沖舟の漕ぎ来
る。雨どきめれ今一返りも。汐汲めや
人ど。そうや陸奥の。そよや陸奥の。
千賀の塩竈。名のみそて遠けれど。
いくど畢遠ぜん伊勢島や。阿漕が浦の
汐とぞ度重ねても汲み難し。田子の
浦の汐とぞいとざりこたんわくら

はよ。訪ふ人あらば。侘ぶとて答へて此須磨の浦の汐汲まん須磨の浦の汐汲まん。

シテ詞「塩屋に帰り休まんずるよ

ワキ「塩屋の主の帰りて候。御宿を借らばやと存じ候。いかにこれなる塩屋の主にてあるか

シテ「さん候塩屋の主にて候

ワキ「これは[illegible]候が太政大臣師長公に申

して。天下に隠れましまさぬ琵琶
の御上手にて候が。入唐の御望にて
此浦に御下向にて候。一夜のお宿を参
らせ候へ「シテ」いやさやうの人にて御座
候はず。異浦にて御宿を召され候へ
ワキ「あら何ともなや。難波わたりにてこそ
異浦なんどと申すべけれ。これは須

磨の浦まで下り候。唯御宿を参らせ
候へ　シテ「見苦しく候へども。さらば御宿を
参らせ候べし　ツレカヽル上「されば一夜の雨の祈
の御時。神泉苑にして。琵琶の秘曲
を遊ばされしかば　シテ同「龍神もめでける
よや。さしもの晴天俄に曇り。大雨降
ること終日。カヽル下　それよりして此君を雨の

大臣とハ申まてとや　かほどやごとな
き此君よ。一夜のお宿を参らせて
秘曲をも聴聞申まてあらぞ。例なき
思出かの蟬丸ハ逢坂や藁屋よ
て琵琶を弾き給ふ。今この君ハ須
磨の塩屋露もたまらぬ軒の板間。
遇ひ難き例よ逢ふぞ嬉しかりける

上三の二

里離れ。須磨の家居の習とて。須磨
の家居の習とて何事も松の柱や。竹
あめる垣ハ一重にて。風もたまらぬ痛
ましや。海ハ少し遠けれども。波た
とゝもにこそ。聞えきてとのまゝ夢を
も驚ゆきよし。それも御琵
琶もて。寝られぬまゝに遊ぎせや。われ

らも聴聞申すべしわれも聴聞申
さん　いざや申しあげん。夜もすがら御
琵琶を遊ばされし　師長「此須磨の
寒の春ならば。源氏此浦に移され給ひ。
初めて世の味ひの辛きを知ると
ども。まだすまぬ旅衣。泣くぞかり
ある涙の露の。玉の緒琴を弾き

鳴し。恋ひ侘びて。泣く音よまがふ浦
波は。思ふ方より。風や吹くらん　それは
浦波の。音通よらし琴の音の。音通ふ
らし琴の音の。どれか弾く琵琶の。ちり
からあれや村雨の。古屋の軒の板庇。月
覺まさて程の夜雨や管絃の障る
らん　何とて琵琶をぞ遊ばさし

とめられて候ぞ　ワキ「さんぴ村雨の降り候

程よ。さて遊ぶしとめられて候　シテ「げによ

村雨の降り候ぞや。いかよ焼苫取り出

し候へ　ツレ「それハ何のためにてやらん

シテ「苫をもて板屋を葺き渡し。降るよ静よ聴聞

申さんと　二人上「おぼちて焼ハ諸共よ　ツレ「苫取

り出し　シテ「さつて葺き塩竈の名の。

近ぐと寄り居て。耳を欹て聞き居たり

なり。いかに主。かほど洩らざる板屋の

上を。何とて苫にて葺きてあるぞ　シテ　さ

んば唯今遊ばされ候琵琶の御調子ハ

黄鐘。板屋を敲く雨の音ハ盤渉よ

て候程よ。苫にて板屋をふき隠し。今

こそ一調子よなりて候へ　されバこそ

給より。常人ならぬ思ひしよ。心よくしや琵琶琴をいそでゝ弾きてあるべき
シテツレ二人「處から江のほとり。船越き波の弾きやせん。琵琶琴の。思ひもよらぬ御諚なり
地「思ひよらずも琴の音の。押してお琵琶を賜はりて
シテ「おぼちは琵琶を調むれぞ
ツレ「姥は琴柱を

立て並べて撥音爪音。ぞらりぞらり。からりからりと。感涙もこぼれえ
いじもおどるぞかりなりや弾いたり
弾いたり面白や
師長「師長思ふや。
師長思ふや。われ日の本まて琵琶の奥儀を極めつ。大国を窺わんと。
思ひし事のあさましさよや。あまのあ

なりける堪能ありける事よ。所詮渡唐を留まらんと。忍びて塩屋を出で絵へぞ。それとも知らで琵琶琴の心一つのたしなみとて。越天楽の唱歌の声。梅が枝にこそ。鶯は巣をくへ。風吹かばいかにせん花に宿る鶯。宿人の帰るとも知らで弾いたり琵琶琴

ツレ「のう旅人の御宿まゐらう　シテ「何旅人の御宿まゐらうや。何とて留め申さぬぞと　シテツレ二人上下「おぼぢて荒はまうより　上同　琵琶琴よりも御袖を唯うけやうけや横雲の。夜はまだ深し浦の名の明かしてお立ちゆく　師長上「何しに留め給はらん。まづ此度は帰洛して。重ねて尋ね申さて

ツレシテ上 今は何

べし。御名をも名のり給へや

をか包むべき。われ絃上のぬしなりし。

村上の天皇梨壺の女御夫婦なり

御身の入唐留めんため。夢の中にま

みえ須磨の浦。故院の昔の夢の告

思ひ出でよくぞとてかき消すやうに。

失せ給ふかき消すやうに失せ給ふ

後シテ上「抑これハ。延喜聖代の御譲。村上の天皇とハ我が事なり。その聖代の御宇かとよ。唐土より三面の琵琶を渡さるゝ。絃上青山獅子丸これなりさる程よ獅子ハ龍宮へ取られしを。いで召し出し弾かせんて。漫々たる海上よ向ひ。いかよ下界の龍神たしかよ聞け。

出端 本越

獅子丸持来つ。仕れて獅子丸浮む
と見えしが。獅子丸浮むと見えし
が。八大竜女を引き連れ引き連れ
かの淨琵琶を授け給ひぬ。師長
をう彈きならし。八大竜王も絃管
の役々。或は波の鼓をすてが。或は琵
琶の名をし負ふ。獅子団乱旋よ打

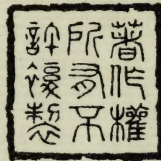
上の天皇も。奏で給ふ面白かりける。
秘曲かな 獅子には文殊や召
さるらん。獅子には文殊や召さるらん。
帝は飛行の車に乗り。八大龍女に
引かれ給ふぞ師長も飛馬に鞭を
打ち。馬に琵琶を。携へて。馬に
琵琶を。携へて。須磨の帰洛ぞ。あ

りがたき

大正六年五月廿五日印刷
大正六年五月三十日發行

訂正者　丸岡桂

發行者　東京市神田區今川小路三丁目九番地　土居源太郎

印刷者　東京市神田區佐久間町一丁目一番地　七條愷

印刷所　東京市神田區佐久間町一丁目一番地　七條式金屬版印刷所

發行所　東京市神田區今川小路三丁目九番地　觀世流改訂本刊行會
電話本局三六〇九番
振替東京一三四七五番